

高校生における学校適応と友人関係形成意欲、 学習意欲との関連

藤原和政・河村茂雄

【問題と目的】

文部科学省（2013）によると、高校生の不登校や中途退学理由として、友人関係や学業に関する要因が上位を占めていることを明らかにしている。この点に関しては、国内外を問わず検討が行われその関連性が示されている。例えば、河村（1999a）は、友人関係形成意欲や学習意欲が高い生徒ほど学校生活に適應していることを明らかにしており、同様の結果は山口・岡本・中山（2004）においても示されている。さらに、坂野・嶋田・三浦・森・小田・猿渡（1994）は、学習に対する自己評価が低い生徒ほど、無気力感や不機嫌でいらした感情を抱きやすい傾向にあることを明らかにしている。また、海外の研究においても、良好な友人関係や学習意欲が高い生徒ほど学校適応が高く（Buhrmester, 1990; Crystol, Chen, Fuligni, Hsn, Ko, Kitamura & Kimura, 1994; Véronneau, Vitaro, Pedersen & Tremblay, 2008）、反対にこれらの意欲が低い生徒ほど学校不適應や中途退学している生徒が多い（Legault, Pelletier, & Demers, 2006; Battin-Pearson, Newcomb, Abbott, Hill, Catalano & Hawkins, 2000, Suh & Suh, 2007）ことが明らかにされている。これらのことから、友人関係形成意欲や学習意欲が高い生徒ほど、学校生活に適應していると考え

られる。

さらに、友人関係形成意欲と学習意欲は、バランスよく高いことが重要であると指摘されている。Ladd, Herald-Brown & Kochel（2009）は、クラスメイトと関わろうとする意欲が低いと、学習場面においても他者と協働して課題に取り組もうとする意欲も低下し、その結果、学校適応に対して負の影響を与える可能性を指摘している。また、河村（2007）は小・中学生を対象に、友人関係形成意欲と学習意欲のバランスと受容感や不安傾向などの心理特性との関連について検討を行い、友人関係形成意欲と学習意欲がともに高い児童生徒は、そうではない児童生徒と比較して、セルフコントロールや向社会性が高く、不安傾向や攻撃性が低いことを明らかにしている。つまり、友人関係形成意欲と学習意欲がともに低かったり、アンバランスな児童生徒は、日々の学校生活において対人関係面や学習場面において困難さを感じる機会が多い可能性があると予想される。したがって、友人関係形成意欲と学習意欲は、どちらかの意欲のみが高いだけではなく、バランスよく高いことが学校適応を促進すると考えられる。

このように、友人関係形成意欲、学習意欲と学校適応との関連性については明らかにされているが、高校生を対象にする際には各学校の特性⁽¹⁾を考慮する必要がある。高等学校では各

学校の大学進学率の違いによって様々な学校の特性があり（中央教育審議会，2013；飯田，2007；河村・藤原，2010），生徒の適応状態は学校の特性によって異なる（Fentzel & Blyth，1986；二宮・大野，1990；岡田，2004）と指摘されている。例えば，学力をとっても重視している大学への進学校もあれば，学習については重要視せず友人関係を重要視している学校もあるからである。このことについては，大久保（2005）の研究において，友人関係要因は学校適応に正の影響を与えるが，学習要因については影響を与える学校もあれば，無関連な学校があったことが明らかにされている。これらの知見から，例えば，友人関係のみを重要視している学校では，友人関係形成意欲が高く学習意欲は低いといったアンバランスな状態でも，学校適応上の問題を抱えない可能性があると考えられる。したがって，友人関係形成意欲，学習意欲と学校適応との関連性は，学校の特性によって異なっていると考えられる。しかしながら，このことについて検討を行っている研究は見当たらないのが現状である。

以上のことから，本研究では友人関係形成意欲，学習意欲と学校適応との関連性について，各学校の特性を考慮した上で検討を行うことを目的とした。なお，調査対象校の分類方法は，先行研究（河村・藤原，2010；永作・新井，2005；大久保，2005など）に準拠し行った。具体的には，大学進学率が80%以上の学校を“進学校”，20%より大きく80%未満の学校を“進路多様校”，20%以下の学校を“非進学校”と分類した。

【方法】

調査対象 A県の県立高等学校，“進学校”の生徒1,029名，“進路多様校”の生徒1,987名，“非進学校”の生徒966名，計3,982名の生徒であった。

調査時期 2007年10月

調査内容 学校適応 河村（1999b）によって作成，標準化されている“学校生活満足度尺度”を用いた。この尺度は，学校生活において満足感や充実感を感じているかや，自分の存在や行動をクラスメイトや教師から承認されているか否かに関連している“承認感（10項目）”と，不適応感やいじめ・冷やかしの被害の有無と関連している“被侵害・不適応感（10項目）”の計20項目から構成されている。“今の学校生活をふり返って，質問に対して自分の気持ちにいちばん近い数字に，1つだけ○をつけてください”という教示のもと，5件法（1：全くそう思わない，2：あまりそう思わない，3：どちらともいえない，4：少しそう思う，5：とてもそう思う）による回答を求めた。なお，各下位尺度の全国平均値を基準に，“学校生活満足群”，“非承認群”，“侵害行為認知群”，“学校生活不満足群”といった，満足度4群に分類して，生徒の学校適応状態を理解することが可能な尺度である。

そして，満足度4群の特徴については，次の通りである。“学校生活満足群”は，承認感が高く被侵害・不適応感が低いことから，不適応感やトラブルが少なく，学校・学級生活に対して満足感や充実感が高いため，学校生活に適応している状態であると判断される群である。“非承認群”は，承認感，被侵害・不適応感と

もに低いことから、不適応感やからかいや無視などの被害を受けている可能性は低いが、学校・学級内で認められることも少ない群である。“侵害行為認知群”は、承認感、被侵害・不適応感がともに高いことから、自主的に諸活動を行っているが、他者とトラブルを起こしている可能性が高い群である。“学校生活不満足群”は、承認感は低く、被侵害・不適応感が高いことから、からかいやいじめ被害などを受けている可能性が高く、なおかつ、学校・学級生活において充実感を感じられる機会も少ないため、学校不適応になっている可能性が高い群である。

友人関係形成意欲、学習意欲 河村（1999 a）によって作成、標準化されている“学校生活意欲尺度”の下位尺度である、“友人との関係（4項目）”と“学習意欲（4項目）”を用いた。“今の学校生活をふり返って、質問に対して自分の気持ちにいちばん近い数字に、1つだけ○をつけてください”という教示のもと、5件法（1：全くそう思わない、2：あまりそう思わない、3：どちらともいえない、4：少しそう思う、5：とてもそう思う）による回答を求めた。

調査手続き 調査は、学校長、学年主任、学級担任に承諾を得た上で、ホームルーム時に集団方式で実施した。本調査が学校の成績に一切関係がないこと、回答は強制ではないこと、教員が回答後の調査用紙を見ることはないこと、個人のプライバシーは保護されることをフェイスシートに明記した。また、質問紙を配布した後に各学級担任からも教示をしてもらった。

【結果】

尺度の信頼係数

各尺度の内的整合性を確認するために、Cronbachの α 係数を算出した。その結果、承認感が $\alpha = .92$ 、被侵害・不適応感が $\alpha = .90$ 、友人との関係が $\alpha = .82$ 、学習意欲が $\alpha = .80$ であり、各尺度の内的整合性が確認された。以下、各尺度の加算得点を尺度得点として用いた。

各学校タイプにおける友人関係形成意欲と学習意欲のバランスの検討

“進学校”、“進路多様校”、“非進学校”における生徒の友人・学習に対する意欲のバランスについて検討を行うために、まず、クラスタ分析による分類を行った。具体的には、友人との関係、学習意欲得点を標準化し、Ward法によるクラスタ分析を行った。解釈可能性を考慮し4クラスタ⁽²⁾による分類を採用した。各クラスタの特徴をFigure 1に示した。クラスタ1（1,679名）は、友人との関係得点、学習意欲得点がともに高かったため“両立群”と解釈した。クラスタ2（828名）は、友人との関係得点は高いが学習意欲得点が低かったため、“友人群”と解釈した。クラスタ3（638名）は、友人との関係得点は低い学習意欲得点が高かったため、“学習群”と解釈した。クラスタ4（837名）は、友人との関係得点、学習意欲得点がともに低かったため、“意欲喪失群”と解釈した。

また、このクラスタの弁別性を検討するために、友人×学習4群を独立変数に、友人との関係、学習意欲を従属変数とする一要因の分散分析を行った。その結果、友人との関係、学習

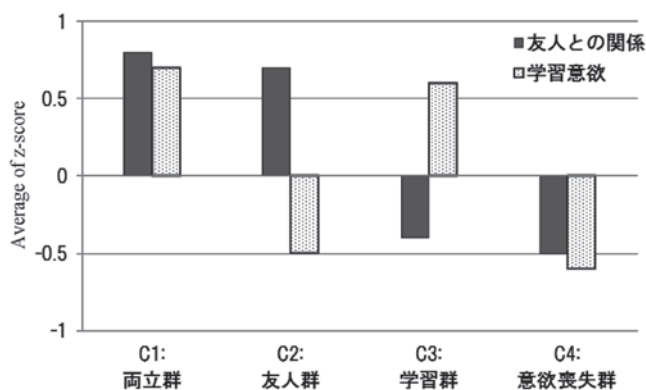


Figure 1 友人×学習4群の特徴

Table 1 友人×学習4群における友人との関係、学習意欲の平均値と標準偏差、分散分析の結果

	C1 両立群	C2 友人群	C3 学習群	C4 意欲喪失群	F値	多重比較
友人との関係	18.80 (1.04)	18.54 (1.11)	14.09 (2.17)	13.44 (2.48)	2823.39**	C1・C2 > C3 > C4
学習意欲	15.29 (1.97)	9.97 (2.03)	14.95 (1.76)	9.58 (2.19)	2194.23**	C1・C3 > C2 > C4

注) 括弧内の値は標準偏差を表す。** $p < .01$

意欲ともに友人×学習タイプ4群の主効果が有意であった (Table 1)。Tukey法による多重比較の結果、友人との関係は、両立群・友人群、学習群、意欲喪失群の順に、学習意欲は、両立群・学習群、友人群、意欲喪失群の順に得点が高かった。この結果より、友人×学習4群の弁別性が確認された。

学校タイプ、友人×学習4群の χ^2 検定の結果

学校タイプと友人×学習4群との関連を検討するために、 χ^2 検定を行った結果、友人×学習4群の出現の分布に有意な偏りが認められたため残差分析を行った (Table 2)。結果、“進学校”では、両立群と学習群に属する生徒が有意に多く、友人群と意欲喪失群に属する生徒は

有意に少なかった。“進路多様校”では有意な偏りは認められなかった。“非進学校”では、友人群と意欲喪失群に属する生徒が有意に多く、両立群に属する生徒が有意に少なかった。

各学校タイプにおける満足度4群と友人×学習4群の χ^2 検定の結果

学校タイプごとに満足度4群と友人×学習4群との関連を検討するため χ^2 検定を行った。結果、全ての学校タイプにおいて出現の分布に有意な偏りが認められたため残差分析を行った。その結果、“進学校”はTable 3に示すような、“進路多様校”はTable 4に示すような、“非進学校”ではTable 5に示すような結果が、それぞれ明らかになった。これらの結果から、

Table 2 学校タイプと友人×学習4群における χ^2 検定の結果

		進学校	進路多様校	非進学校	合計
両立群	n	512	836	331	1,679
	Adj	5.73**	-0.12	-5.71**	
友人群	n	177	415	236	828
	Adj	-3.30**	0.14	3.20**	
学習群	n	186	312	140	638
	Adj	2.09*	-0.55	-1.49	
意欲喪失群	n	154	424	259	837
	Adj	-5.53**	0.49	5.08**	
合計	n	1,029	1,987	966	3,982

注) χ^2 (6) 78.61, $p < .01$ ** $p < .01$, * $p < .05$

Table 3 進学校における満足度4群と友人×学習4群における χ^2 検定の結果

		満足群	非承認群	侵害行為認知群	不満足群	合計
両立群	n	346	21	92	53	512
	Adj	12.20**	-5.00**	-3.03**	-8.25**	
友人群	n	95	16	48	18	177
	Adj	0.52	0.47	1.69	-2.69**	
学習群	n	31	45	63	47	186
	Adj	-7.84**	4.89**	4.93**	1.04	
意欲喪失群	n	13	22	26	93	154
	Adj	-10.81**	2.38**	-1.62	13.18**	
合計	n	485	104	229	211	1,029

注) χ^2 (9) 315.65, $p < .01$ ** $p < .01$

Table 4 進路多様校における満足度4群と友人×学習4群における χ^2 検定の結果

		満足群	非承認群	侵害行為認知群	不満足群	合計
両立群	n	485	155	122	74	836
	Adj	17.03**	-6.75**	1.29	-13.30**	
友人群	n	165	152	48	50	415
	Adj	1.83	5.56**	-1.81	-6.49**	
学習群	n	41	81	66	124	312
	Adj	-9.45**	-0.31	4.45**	7.44**	
意欲喪失群	n	35	137	32	220	424
	Adj	-13.67**	3.01**	-3.79**	15.38**	
合計	n	726	525	268	468	1,987

注) χ^2 (9) 598.74, $p < .01$ ** $p < .01$

Table 5 非進学校における満足度4群と友人×学習4群における χ^2 検定の結果

		満足群	非承認群	侵害行為認知群	不満足群	合計
両立群	n	136	72	71	52	331
	Adj	9.61**	-3.47**	5.71**	-9.13**	
友人群	n	74	61	36	65	236
	Adj	3.21**	-0.95	0.81	-2.49**	
学習群	n	11	47	16	66	140
	Adj	-6.02**	2.74**	-1.59	3.81**	
意欲喪失群	n	17	81	19	142	259
	Adj	-7.72**	2.11**	-5.31**	8.47**	
合計	n	238	261	142	325	966

注) χ^2 (9) 242.96, $p < .01$ ** $p < .01$

学校適応と関連している友人関係形成意欲と学習意欲のバランスは、各学校の特性によって差異があることが示唆された。

【考察】

本研究では、友人関係形成意欲、学習意欲と学校適応との関連について、学校の特性を考慮し検討することを目的としていた。結果、“進学校”、“進路多様校”、“非進学校”ごとに特徴的な結果と、各学校に共通する結果とが明らかになった。そこで、まず、学校の特性ごとに考察を行い、次いで、共通する結果について考察を行うこととする。

1 学校タイプごとに特徴的な結果に対する考察

1) “進学校”の特徴

生徒たちの分布では、“進路多様校”と“非進学校”と比較して、両立群と学習群が有意に多く友人群と意欲喪失群が有意に少なかった。このことから、“進学校”の特徴として、学習意欲が高い生徒が多く在籍しているということが確認された。日々の授業場面はもとより個別

学習やグループ学習などに対しても意欲的に取り組んでいると考えられる。また、友人関係に対する意欲が高い生徒も多いことから、新たな友人関係を形成したり、既存の友人関係を深化するなど、友人とのかかわりに対しても意欲的になっていると考えられる。“進学校”では他の学校と比較して良好な人間関係が多く形成されている傾向がある（河村・藤原, 2010）。それが学級内の人間関係を良好なものにし、友人やクラスメイトからの拒否や無視をされないという安心できる学校・教室環境での学習活動は、生徒の学習意欲を促進する（鹿毛, 2013）という、友人と学習に対する意欲が肯定的な相互作用の循環が生じていると推察される。

また、“進路多様校”や“非進学校”では、学習群は学校生活不満足群に有意に多く出現していたが、“進学校”ではそのような傾向は認められなかった。概して、学習にだけ傾倒する生徒は、クラスメイトからからかいなどの侵害行為は受けにくい、孤立しやすく学校不適応を示す傾向がある（Espinoza, Gonzales & Fuligni, 2013; Marsh, 1991）。学習意欲のみが高

い生徒の特徴として、他者と仲良くしなければならぬという意識が低いため、周りの生徒は受け入れ難い面がある（河村，2007）と指摘されていることから、不適応になりやすい傾向があると考えられる。しかし，“進学校”ではクラスメイトはそのような状況を異質なものと認識していないと推察される。つまり、生徒同士の間人間関係が良好なため、他者に対して受容的になっており、かつ、学習に対する価値づけも高いことが想定され、学習群の生徒は孤立することもなく、学校不適応を示していない可能性が高いと推察される。

2) “進路多様校”の特徴

“進路多様校”では、友人×学習4群の出現分布に有意な偏りが認められなかった。この高等学校は、大学進学率が20%より大きく80%未満の学校である。そのため、大学や短期大学への進学を希望している生徒もいれば、専門学校や就職を希望している生徒もおり、生徒が日々の学校生活を過ごす上での目的意識が分散していると推察される。そのために、出現分布に有意な偏りが認められなかったと考えられる。

また、友人群が非承認群に有意に多く属していたことも特徴である。この結果は次の2つの先行研究から考察することができるだろう。まず，“進路多様校”では教員たちは生徒に学校や学級のルールを遵守することを求める傾向がある（河村・藤原，2010）という指摘である。生徒たちの目的意識が分散的であるため、生徒たちや学級集団をまとめていくためにそのような傾向が生まれることが推測される。次に、友人関係に対する意欲のみが高い生徒の特徴として、特定の友人関係を重視しその中の対人関

係のマナーを守ろうとする意識は高いが、学校や学級のルールを守ろうとする意識や学級内の他のクラスメイトに対するマナー意識は低い（河村，2007）という指摘である。これらのことから、友人群の生徒は他者から侵害行為を受けることは少ないが、教員やクラスメイトから認められる機会が少ないことが推察され、結果として、非承認群に有意に多く属しているのではないかと考えられる。

3) “非進学校”の特徴

“進学校”と“進路多様校”と比較して、友人群と意欲喪失群が有意に多く、両立群と学習群が有意に少なかった。学習意欲が低く日々の授業や学習活動に意欲的に取り組まず、特定の友人とのかかわりに対してのみ意欲的になっている生徒か、もしくは、友人関係にも学習に対しても意欲が低い生徒が多く在籍していると考えられる。

“非進学校”の特徴として次の2つの点が挙げられる。まず、両立群が侵害行為認知群に有意に多く属していた。次に、友人群が学校生活満足群に有意に多く属していたことである。

前者については、両立群は友人関係も学習にも意欲的に取り組んでいる生徒であるが、学級内で学習に対して意欲的に取り組んでいる生徒は少数であり、学校や学級内で浮いてしまっているなど被侵害感を感じる機会が多くなっているのではないかと考えられる。

後者については、学習意欲が低い生徒たちが多い“非進学校”では、友人群の生徒たちは多数派であり、日々の学校生活において特定の友人とのかかわりの中で充実感を感じたり、認められたりする機会となっていると考えられ、学校生活満足群に多く属していたと考えられる。

学習にも意欲的に取り組んでいる両立群が侵害行為認知群に有意に多く属していた結果と表裏をなすものであると考えられる。この実態から、“非進学校”では、授業などの学習活動の展開方法を変えていく必要があることを示唆している結果でもあるだろう。

2 各学校に共通する結果についての考察

高等学校には様々な特性があるが、すべての学校で生徒が学校生活を適応的に過ごす上で、友人関係の重要性をあらためて示している。日本の学校では、最低一年間、学級を構成する生徒集団が固定化された中で、日々の学習活動が展開されている（河村，2010）。そして、Ladd et al. (2009) の指摘も考慮すると、良好な友人関係を形成できていない場合、学習場面におけるグループ学習などの取り組みにも困難さが生じ、その結果、学校生活に対する不適応感が高まってしまう可能性が高いと考えられる。そのため、これらの生徒に対して早急な援助が必要になってくると考えられる。

さらに、意欲喪失群が非承認群にも有意に多く属しているという結果に留意する必要があるだろう。非承認群の特徴として、日々の学校生活において他者から承認される機会も被侵害感を感じる機会も少なく、非社会的な傾向を示している（河村，1999b）生徒である。中途退学者の類型化を試みている研究（Janosz, Blanc, Boulerice & Tremblay, 2000）では、特に注意が必要な中退者群として、“quiet dropout”の存在が指摘されている。この中退者群は、他者から認められたり受容されていると感じる機会は少ないが、対人トラブルなどを抱えていない傾向があるため、教員からは学校生活に不適応

を示している生徒とは認識されにくいと指摘されている。つまり、Janosz et al (2000) が指摘する中退者群の特徴と、非承認群の特徴は合致する点が多いと考えられる。さらに、本研究の結果と、Suh & Suh (2007) の指摘を考慮すると、非承認群に属する生徒は、中途退学してしまう可能性が高い生徒であると考えられる。したがって、学校の特性に関わらず、意欲喪失群で非承認群の生徒たちには、友人面と学習面について、各学校の実態に応じた開発的な援助が必要であろう。

【今後の課題】

本研究における今後の課題として、次の点が考えられる。高等学校は単位制高等学校や工業高等学校など、特色のある学校もあるなど非常に多様な特徴をもつ教育課程である。だが、本研究の調査対象は普通高等学校のみであった。そのため、上記したような特色のある学校も調査対象とし、検討を行う余地が残されていると考えられる。

注(1) 学校の特性について河村・藤原（2010）は、小野瀬（1998）と石隈（1999）の指摘を参考に、「各学校における学校経営方針や学校の雰囲気、および、生徒に対する教師の指導行動の差異」とであると定義している。

(2) クラスタ分析によって分類された4クラスタについて、以下、友人×学習4群と記す。

引用文献

- Battin-Pearson, S, Newcomb, M. D. Abbott, R. D., Hill, K. G. Catalano, Richard F. & Hawkins, J. D. 2000 Predictors of early high school dropout: A test of five theories. *Journal of Educational Psychology*, 92, 568-582.
- Buhrmester, D 1990 Intimacy of friendship, interper-

- sonal competence, and adjustment during preadolescence and adolescence. *Child Development*, 61, 1101-1111.
- 中央教育審議会 2013 初等中等教育分科会高等学校教育部会 第11回部会(1)高等学校教育の在り方について 資料1 課題の整理と検討の視点
- Crystol, D. S., Chen, C., Fuligni, A. J., Hsn, C., Ko, H., Kitamura, S. & Kimura, S. 1994 Psychological maladjustment: A cross-culture study of Japanese, Chinese, and American high school students. *Child Development*, 65, 738-753.
- Espinoza, G., Gonzales, N & Fuligni A. 2013 Daily school peer victimization experiences among Mexican-American adolescents: Associations with psychosocial, physical and school adjustment. *Journal of Youth and Adolescence*, 42, 1775-1788.
- Fentze, L. M., & Blyth, D. A. 1986 Individual adjustment to school transition: An exploration of the role of the supportive peer relations. *Journal of Early Adolescence*, 6, 315-329.
- 飯田浩之 2007 中等教育の格差に挑む—高等学校の学校格差をめぐって— 教育社会学研究, 80, 41-60.
- 石隈利紀 1999 学校心理学 教師・スクールカウンセラー・保護者のチームによる心理教育的援助サービス 誠信書房
- Janosz, M., Blanc, M., Boulerice, B. & Tremblay, R. 2000 Predicting different types of school dropouts: A typological approach with two longitudinal samples. *Journal of educational psychology*, 92, 171-190.
- 鹿毛雅治 2013 学習意欲の理論 金子書房
- 河村茂雄 1999a 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の活用(高校生用) 岩手大学教育学部研究年報, 59, 101-108.
- 河村茂雄 1999b 生徒の援助ニーズを把握するための尺度の開発—学校生活満足度尺度(高校生用)の作成— 岩手大学教育学部研究年報, 59, 111-120.
- 河村茂雄 2007 データが語る② 図書文化社
- 河村茂雄 2010 日本の学級集団と学級経営 図書文化社
- 河村茂雄・藤原和政 2010 高校生の学校適応を促進するための援助に関する研究—学校タイプ、学校生活満足度の視点から— 学校心理学研究, 10, 53-62.
- Ladd, G. W., Herald-Brown, S. L. & Kochel, K. P. 2009 Peers and motivation. (Wetzel, K. R. & Wigfield, A. *Handbook of motivation at school*) 323-348. New York, NY: Routledge.
- Legault, L., Pelletier, L. & Demers, I. 2006 Why do high school students lack motivation in the classroom? Toward an understanding of academic amotivation and the role of social support. *Journal of educational psychology*, 98, 567-582.
- Marsh, H. W. 1991 The failure of high-ability high schools to deliver academic benefits: The importance of academic self-concept and educational aspirations. *American Educational Psychology*, 28, 445-480.
- 文部科学省 2013 生徒指導上の諸問題と現状について
- 永作 稔・新井邦二郎 2005 自律的高校進学動機と学校適応・不適応に関する短期縦断的検討 教育心理学研究, 53, 516-528.
- 二宮克美・大野 久 1990 学校生活における青年(久世敏雄 編著 変貌する社会と青年の心理) 福村出版 157-182.
- 岡田有司 2004 学校適応研究における諸問題—理論と研究方法の側面から— 大学院研究年報(文学研究科篇:中央大学), 34, 213-229.
- 小野瀬雅人 1998 学校のアセスメント(高野清純・渡辺弥生 編著 スクールカウンセラーと学校心理学) 教育出版 62-81.
- 大久保智生 2005 青年の学校への適応感とその規定要因—青年用適応感尺度の作成と学校別の検討— 教育心理学研究 53, 307-319.
- 坂野雄二・嶋田洋徳・三浦正江・森 治子・小田美穂子・猿渡末治 1994 高校生の認知的個人差が心理的ストレスに及ぼす影響 早稲田大学人間科学研究, 7, 75-90.
- Suh, S. & Suh, J. 2007 Risk factors and levels of risk for high school dropouts. *Professional School Counseling*, 10, 297-306.
- 武内 清 1981 高校における学校格差文化 教育社会学研究, 36, 137-144.
- Véronneau, M. H., Vitaro, F., Pedersen, S. & Tremblay,

- R. E. 2008 Do peer contribute to the likelihood of secondary school graduation among disadvantaged boys? *Journal of Educational Psychology*, 100, 429-442.
- Wentzel, K. R. 2005 Peer relationships, motivation, and academic performance at school. (Elliot, J & Dweck, C. S. *Handbook of competence and motivation*) 279-296. New York, NY : Guilford Press.
- 山口正二・岡本貴行・中山 洋 2004 高等学校における部活動への参加と学校適応度との関連性に関する研究—学校類型の視点より— *カウンセリング研究*, 37, 232-240.